

# カリキュラム・ナンバリング・マップとペルソナ・マーケティングを用いたカリキュラム改善システムの提案

吉田 誠<sup>1)</sup>

本研究は国立大学改革加速期間に向けた自主的・自律的な改善・発展を促す仕組み構築を念頭に置き、特にカリキュラム改善について異なる専門分野を持つ教員が協働して取り組むためのコミュニケーションツールの開発を行うことを目的とする。本稿ではカリキュラム改善のツールとしてカリキュラム・ナンバリング・マップの試案を作成し、これを継続的なカリキュラム改善の基本ツールとすることを提案した。カリキュラム・ナンバリング・マップを用いるメリットとしては、カリキュラムの体系的が各科目のディプロマ・ポリシーとの対応関係とは独立した形で表現できること、カリキュラムの順序性の課題を確認することができること、ディプロマ・ポリシーとカリキュラムの整合性を確認することができることの三点があげられる。また、今後の課題として各学科あるいはコース単位で作成した学生ペルソナを異なる専門分野を持つ教員が協働してカリキュラム改善に取り組むためのコミュニケーションツールとして提案した。

キーワード：科目ナンバリング，カリキュラム・ツリー，カリキュラム・マップ，ペルソナ・マーケティング

## 1. 提案の背景

現在、国立大学改革加速期間に向けて、各国立大学法人に対して自主的・自律的な改善・発展を促す仕組みを構築することが求められている<sup>1)</sup>。山形大学においても、全学教員の一元管理等の組織改革が検討されている。しかし、現状では多様な専門分野を持つ教員が各専門分野で分かれて組織されているため、一人ひとりが持つ研究の専門性や教育能力について相互に理解しあう風土や体制が整っておらず、組織改革のみでは各教員の潜在能力を協働的に発揮することが困難である。

また、グローバル人材や地域のニーズに応じた人材の育成が求められ、そのための教育改革とともに学士課程教育の質的保証も求められている。しかし、グローバル人材や地域のニーズに応じた人材とはどのような資質、能力を備えた人物なのか、大学においてそのような人材を育てるために現状のどこに課題があり、それをどのように改善すればよいのか、等の検討方法については各大学に委ねられ、具体的方策は存在しないため各大学で模索状態である。

このような状況の下、山形大学においても複数学部の統合を視野に入れた学部改組の検討が行われている。しかし、専門分野の異なる教員がそれぞれの専門性や教育能力をいかにして協働的に結び付けて教育研究活動を充実させるか、そして、教員同士の協働的な結びつきをグローバル人材や地域のニーズに応じた人材の育成にいかにつなげるか、という議論よりも、自分の専門分野をいかにして守るかという議論に陥りがちで、異なる専門分野間の利害対立をより深めてしまうことが懸念される。また、改組案を検討する際に、大学卒業時の就職率などの数値的な根拠が重視されるあまり、学士課程教育の質が量によってすべて測定されるかのような誤解が広がり、学生を就職させることにのみ注力して却って教育の質が低下することも懸念される。

しかも、学部改組それ自体は、文部科学省が「国立大学改革プラン」において「第3期に目指す国立大学の在り方」として示した「各大学の強み・特色を最大限に生かし、自ら改善・発展する仕組みを構築することにより、持続的な『競争力』を持ち、高い付加価値を生み出す国立大学」のうち、「自ら改善・発展する仕組み」の構築に直接的につながるものではない。人材育成に関して「自ら改善・発展する仕組み」を構築するには単に定期的に学部改組を行うのでは

1) 山形大学 地域教育文化学部 児童教育コース

なく、定期的カリキュラムと学生の学習経験および人材としての成長過程とのつながりを確認し、恒常的にカリキュラム改革を図るための組織的対応が必要である。

このような問題に対応し、急激な社会の変化に柔軟に対応して恒常的にカリキュラム改善を図ることのできる教職員組織を作っていくためには、大学教育について全教職員が建設的に語り合える共通のコミュニケーションツールの開発が必要である。

大学におけるカリキュラム改革のツールとしては、科目ナンバリングやカリキュラム・マップ、カリキュラム・ツリーといったものが挙げられる。そして、これらのツールを用いたカリキュラム改革の取組についてはいくつかの大学で既に行われている。そこで、本稿では中教審などの見解と各大学におけるカリキュラム改革の取組を基にこれらのツールを用いることの利点と課題を検討した上で、その課題を克服し、多様な専門分野を持つ教員が協働してカリキュラムの恒常的な改善に取り組むことのできるコミュニケーションツールの提案を行うことにする。

## 2. 科目ナンバリングの目的とカリキュラム改善における課題

科目ナンバリングとは、大学の授業科目に一定のルールに従ってアルファベットや数字を用いたコード番号を付与することである。近年の中央教育審議会や文部科学省における科目ナンバリングに関する議論としては、例えば平成24年3月26日の中央教育審議会大学分科会大学教育部会「予測困難な時代において生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ（審議まとめ）」において、「講義概要（コースカタログ）とは異なり、授業のための事前の準備といった学生の主体的な学びに必要な、いわば授業の工程表である『授業計画（シラバス）』、教員が個々の授業科目の充実にエネルギーを投入することを可能とするための授業科目同士の整理・統合と連携、教育課程の国際的な通用性を視野に入れつつこのような整理・統合と連携を可能とする『ナンバリング』等は、質を伴った学修時間の実質的な増加・確保の上でも有効である。（ゴシックと下線は引用者による）」とされている。

また、平成24年8月28日に中央教育審議会から出された「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～（答申）」では、大学として一貫性・体系性を持ったプログラムを提供することによる大学教育の質的保証・単位制度の実質化を求めている。その中の「6. 学士課程教育の質的転

換への方策」では次のような文脈で科目ナンバリングに触れられている。

学修時間の実質的な増加・確保は、以下の諸方策と連なって進められる必要がある。

### ・ 教育課程の体系化

大学、学部、学科の教育課程が全体としてどのような能力を育成し、どのような知識、技術、技能を修得させようとしているか、そのために個々の授業科目がどのように連携し関連し合うかが、あらかじめ明示されること。なお、大学としての学位授与の方針に対して授業科目数が過多であったり、科目の内容が過度に重なっている場合は、その精選の上に体系化が行われる必要がある。また、科目を履修する学生をはじめ、当該大学、学部、学科等が提供している教育課程の内容に関心を持つ全ての人に教育課程の体系が容易に理解できるように、科目間の関連や科目内容の難易を表現する番号をつける（ナンバリング）など、教育課程の構造を分かりやすく明示する工夫が必要である。

### ・ 組織的な教育の実施

体系的な教育課程に基づいて、教員間の連携と協力による組織的教育が行われること。往々にして大学の授業（授業科目）は個々の教員の責任に委ねられ、教員の専門性に引きつけた授業科目の設定が行われてきたが、学士課程教育の質的転換のためには、教員全体の主体的な参画による教育課程の体系化と並んで、授業内容やその実施に関わる教員の組織的な取組が必要である。

### ・ 授業計画（シラバス）の充実

学生に事前に提示する授業計画（シラバス）は、単なる講義概要（コースカタログ）にとどまることなく、学生が授業のため主体的に事前の準備や事後の展開などを行うことを可能にし、他の授業科目との関連性の説明などの記述を含み、授業の工程表として機能するように作成されること。

### ・ 全学的な教学マネジメントの確立

教員の教育力の向上を含む諸課題の発見と解決を進めるため、学長のリーダーシップの下、全学的な教学マネジメントを確立し、大学教育の改革サイクルを展開させること。

このように学士課程教育を各教員の属人的な取組から大学が組織的に提供する体系立ったものへと進化させ、学生の能力をどう伸ばすかという学生本位の

視点に立った学士課程教育へと質的な転換を図るためには、教員中心の授業科目の編成から学位プログラム中心の授業科目の編成への転換が必要である。(ゴシックと下線は引用者による)

そして、この答申では「学位プログラム中心の授業科目の編成」の事例として、金沢工業大のカリキュラム・フロー(マップ)到達目標達成型教育プログラムを紹介している。

また、答申の20頁では、「①速やかに取り組むことが求められる事項」として「教育プログラムの策定においては、CAP制やナンバリング等を実際に機能させながら、教員が個々の授業科目の充実にエネルギーを投入することを可能とするように授業科目の整理・統合と連携を図る。」とされている。

以上のことから、科目ナンバリングには大きく分けて  
①海外あるいは学外から見ても分かりやすいカリキュラム編成への転換を図る  
②授業科目の学修段階の位置づけや順序の体系性を明示することにより、授業科目同士の整理・統合・連携を図る  
③カリキュラム・マップやカリキュラム・ツリーとの関連づけによりディプロマ・ポリシーやカリキュラム・ポリシーに対する学生・教員の意識向上を図る

の三つの目的があり、それらを達成することで学修時間の確保や学生の能力向上といった学士課程教育の質的保証および学習到達度の標準化による単位互換の促進を図ろうとするものであると考えられる。

次に、現在いくつかの大学で実施されている科目ナンバリングの方法を類型化し、各方法についてナンバリング実施に際しての作業の困難度の提示を試みる。まず、科目の分類方法としては、①学部・学科・科目群による分類、②学問領域・分野による分類、③ディプロマ・ポリシーによる分類が挙げられる。

①学部・学科・科目群による分類は、当該科目が開設される学部、学科、科目群などをそれぞれ数字で表記する方法である。この方法はナンバリングを事務的作業のみで行えるため、比較的容易に実施することができる。

②学問領域・分野による分類は、当該科目の学習内容を各大学で設定した学問領域の分類や科研費細目表などの分類法に従って分類し、数字やアルファベットなどで表記する方法である。この方法の場合には学問領域や分野の分類法を適切に設定したり、各科目の分類を決定したりする際に各科目担当教員の協力が必須となるであろう。そのため、作業の困難度は①より難しく、③よりは容易であるという

意味で中程度と考えられる。

③ディプロマ・ポリシーによる分類は、各科目が最も該当するディプロマ・ポリシーを数字やアルファベットで表記する方法である。この方法は各学部、学科開設科目の該当するディプロマ・ポリシーがディプロマ・ポリシーのすべてを網羅しているか、また該当するディプロマ・ポリシーに偏りがいないかを確認する必要があり、各科目の担当教員間で調整が必要となる。しかも、科目によっては複数のディプロマ・ポリシーに該当し、一つに絞り込めない可能性もあるため、作業は最も困難である。現時点ではカリキュラム・マップで各科目が該当するディプロマ・ポリシーを表示している事例は見られるが、ナンバリングに導入している例は見当たらない。

次に、科目ナンバリングにおける科目の順序付けの方法としては、a) 科目内容の難易度による順序付け、b) 学年による順序付け、c) カリキュラムの積み上げによる順序付けが挙げられる。a) 科目内容の難易度による順序付けは、各科目の担当教員が当該科目の難易度を設定するだけではなく、教員間で設定した難易度についての整合性や妥当性を確認、調整する必要があるため実現が困難であることが予想される。b) 学年による順序付けについては、各科目の開設学年を基に事務的に順序付けが可能であるため、最も容易に実現可能である。c) カリキュラムの積み上げによる順序付けについては、カリキュラム・ツリーなどを用いて各学部・学科開設科目の系統性や順序性を確認した上で順序付けを行う必要があるため、科目内容の難易度による順序付けに比べれば実現可能性は高いが、各科目の担当教員間で協議、確認しながらカリキュラム・ツリーを作成する作業が必要となるため、学年による順序付けよりも実施は困難である。

最後に、科目ナンバリングにおいて同一番号が複数の科目に割り当てられるか否かについての分類としては、f) 科目識別番号とi) 科目類型番号が考えられる。f) 科目識別番号は、各科目に他の科目とは異なる番号が割り当てられるため、ナンバリングを用いて当該科目を特定することが可能である。これに対して、i) 科目類型番号の場合には同じ番号が複数の科目に割り当てられることがある。

次に、科目ナンバリングにおける①海外あるいは学外から見ても分かりやすいカリキュラム編成への転換を図る  
②授業科目の学修段階の位置づけや順序の体系性を明示することにより、授業科目同士の整理・統合・連携を図る  
③カリキュラム・マップやカリキュラム・ツリーとの関連づけによりディプロマ・ポリシーやカリキュラム・ポリシー

に対する学生・教員の意識向上を図る、の三つの目的を達成する上での課題について論じる。

上記三つの目的を達成する上で、科目ナンバリングが果たす役割は a.単位互換・留学・就職等、外部から見て科目の分野、難易度等をわかりやすくすること、および b.授業科目の学修段階の位置づけや順序の体系性を明示することにより、授業科目同士の整理・統合・連携を図るとともに学生の学修時間の確保と学力向上を図ること、すなわちカリキュラムの改善に役立てることであると考えられる。

a. 単位互換・留学・就職等、外部から見て科目の分野、難易度等をわかりやすくすることに関しては、次の二つの方法が考えられるが、それぞれに課題が存在する。第一に、外部から分野、難易度をわかりやすくする最善の方法は複数の国立高等専門学校において試行されているようにモデルコアカリキュラムを策定し、共通のディプロマ・ポリシーに対する各授業が想定する到達度を段階化したナンバリングの表記を用いることであろう<sup>2</sup>。しかし、科目の難易度を共通ルールで表記するためには、カリキュラムとディプロマ・ポリシーを標準化する必要がある。これは技術者教育のように学生が備えるべき知識や技能が明確な分野では可能だが、その半面で各大学において教育の特色を出すことが困難になる。第二に、各大学で教育内容に特色を出しながら外部から分野、難易度をわかりやすくする方法として、分野については一覧表を作成し、難易度についてはカリキュラムを段階化することが考えられる。しかし、分野の一覧表については作成可能であるが、現行のカリキュラムで明確な段階化がなされていない場合、難易度については表示することが困難である。

b. 授業科目の学修段階の位置づけや順序の体系性を明示することにより、授業科目同士の整理・統合・連携を図るとともに学生の学修時間の確保と学力向上を図ることに関しても次の二つの課題が存在する。第一に、科目ナンバリングはカリキュラム改善の結果、体系化されたカリキュラム全体における科目の位置を表示するものであるため、カリキュラムの改善を目的とするのであれば、まずカリキュラム・マップあるいはカリキュラム・ツリーを作成し、現状のカリキュラムの問題点を明確にした上でカリキュラム改革を行う必要がある。第二に、学生の学習時間の確保と学力向上については、カリキュラムの体系化だけでは達成されず、各科目担当教員が当該科目のディプロマ・ポリシーとの関係やカリキュラム全体における当該科目の位置づけを踏まえて学習目標、到達度評価方法、教育方法を改善し、それをシラバスに明記するとともに学生に周知徹底するこ

とが必要であろう。従って、科目ナンバリングよりもシラバスの記述内容と利用方法を改革することの方がこの目的に対する寄与度が高いと考えられる。

以上のことから、科目ナンバリングにおいて科目の分野、難易度、学修段階、順序などを明示し、それを実質化するためには、カリキュラム全体としての到達目標、すなわちディプロマ・ポリシーの妥当性と、そのディプロマ・ポリシーに至る系統性や段階性、各系統による到達目標達成の網羅性を担保するためのカリキュラム検証と改善を継続して行うこと、および各科目において求められる到達目標を達成するために担当教員による達成度の評価と授業改善を継続して行うことが前提となることは明らかである。このようなカリキュラムおよび各科目の検証・評価と継続的改善を行う方法としては、国立高等専門学校で試行しているような知識や技能の標準化に基づく到達度の数値化による方法も考えられる。しかし、大学における学修内容は知識や技能のみに留まらず、既存の知識や技能を現実の未解決の課題に柔軟に適用する能力が求められている。知識や技能の標準化に基づく到達度の数値化によるカリキュラム改善だけでは、既存の知識や技能を現実の未解決の課題に柔軟に適用する能力のように数値化になじまないディプロマ・ポリシーに関するカリキュラム改善は困難である。

数値化になじまないディプロマ・ポリシーに関するカリキュラム改善方策の一つとして、現状のカリキュラムの課題と改善点をカリキュラム・マップやカリキュラム・ツリーによって確認し、改善する方法が考えられる。

### 3. カリキュラムの図式化とカリキュラム改善の取り組み

カリキュラム・マップ、カリキュラム・ツリー等の名称とそれらの内容との関係については、各大学で模索状況にあって統一的な見解は存在しない<sup>3</sup>。池田らがカリキュラム・マップの例およびカリキュラム・ツリーの例として示している図(図1・表1参照)<sup>4</sup>からも明らかなように、一般的には、カリキュラム・ポリシー(履修科目の順序性・系統性)と科目間の連携を中心に示したものをカリキュラム・ツリー、ディプロマ・ポリシーと科目との関係を中心に示したものをカリキュラム・マップと呼ぶことが多い。また、科目ナンバリングはカリキュラム・ポリシーと関連付けて用いられることが多いと思われる。

小川によれば、山口大学ではグラデュエーション・ポリシー(ディプロマ・ポリシー)と科目との関係を中心に示したカリキュラム・マップを作成後、ディプロマ・ポリシーと科目との関連も意識しながらカリキュラム・ポリシー

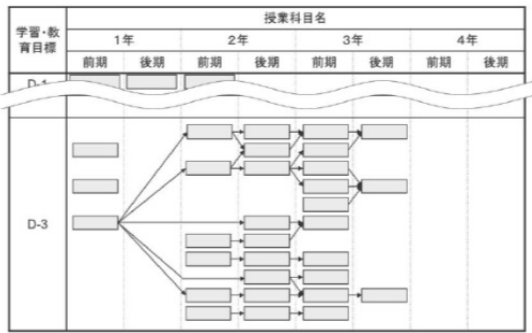


図1 カリキュラム・ツリーの例

表1 カリキュラム・マップの例

科目区分	科目名	DP1	DP2	DP3	DP4	DP5	DP6
入門科目	●●●学入門						○
	リテラシー入門	○					
小集団科目	研究入門						○
	基礎構築		○	○			
卒業論文	卒業論文						
概論	●●●概論Ⅰ				○	○	
	●●●概論Ⅱ				○	○	
	●●●概論Ⅲ				○	○	
講義	●●●			○			
	●●●		○				

(履修科目の順序性・系統性)と科目間の連携を中心に示したカリキュラム・フローチャートを作成し、カリキュラム改善の取り組みを行っている。しかし、その過程で、「一つの科目が複数のG Pの達成に貢献する場合には、同じ科目名」をフローチャートに複数表示させることになることが示されている<sup>5)</sup>。

また、「1年次から科目間の順序性や関連性を重視して年次を追って順番に科目を積み上げていくことによってG Pを達成していく」理系系統と「学生の興味・関心に応じて、科目の選択の幅や履修順序の自由度の高いカリキュラムを編成している」人文系統の二つの系統があるため、系統によってカリキュラム・フローチャートとカリキュラム・マップや学習ポートフォリオを使い分ける必要があるという課題も示されている<sup>6)</sup>。そのため、総合大学において学問の系統によらず共通の形式でカリキュラムの全体像を把握することができないという問題がある。しかも、先に述べたようにカリキュラム・フローチャートには一つの科目が複数表示されている可能性があるため、カリキュラムの全体像を学生や外部から見てもわかりやすく表示できているとは言い難い。

そこで、科目とディプロマ・ポリシーとの関連については一科目について最も関連性の深い一つのディプロマ・ポリシーのみを表示する形にして、科目とディプロマ・ポリシーの関係の表示と科目の順序性・系統性や科目間の連携

の表示とを両立させる新たな形式のカリキュラムの図式化方法であるカリキュラム・ナンバリング・マップの開発を行った。

#### 4. カリキュラム・ナンバリング・マップの開発

既存のカリキュラム・マップでは各科目のディプロマ・ポリシーとの関係性を示すことはできるが、科目間の関連性や順序性を示すことは困難である。カリキュラム・ツリーでは科目間の関連性や順序性を示すことはできるが、各科目とDPとの関係性を示すことは困難である。また、科目ナンバリングについても各科目の分野・領域と順序性を示すことはできるが、科目間の関連性やディプロマ・ポリシーとの関係性を示すことは困難である。

これらの問題を克服し、一つのマップで各科目とディプロマ・ポリシーとの関連性、科目間の関連性と順序性、各科目の分野・領域を表示できるように開発したものがカリキュラム・ナンバリング・マップ(図2参照)である。

今回は山形大学地域教育文化学部児童教育コースの教科実践力向上プログラムについてカリキュラム・ナンバリング・マップの試案を作成した。児童教育コース教科実践力向上プログラムの場合、卒業要件となっている小学校教員免許の課程を中心に幼稚園教諭免許の課程、社会教育主事資格、司書教諭免許の課程が並立し、それぞれの課程においてある程度の系統性や順序性があるとともにある程度科目選択の自由度もあるカリキュラム構成となっている。そのため、児童教育コース教科実践力向上プログラムのカリキュラム・ナンバリング・マップを開発すれば、他学部や他コースへの応用は比較的行きやすいと考えられる。

カリキュラム・ナンバリング・マップにおいては、各学期に科目ナンバーと科目名を配置し、科目間の順序性を片矢印で、相関性を両矢印で表示している。また、右端にディプロマ・ポリシーと教職課程の履修カルテに示された教員として必要とされる資質能力との関係を表示し、さらにそれらをグループ化してグループごとに色分けした。さらに、ディプロマ・ポリシーおよび教員として必要とされる資質能力の各グループの色とそれらが該当する科目の背景色を一致させることで各科目において重点的に指導されるディプロマ・ポリシーを表示している。また、背景に網掛けをした部分は教職科目であることを示しているが、このような背景の網掛けによって資格取得に関わる科目群を表示することもできる。

なお、カリキュラム・ナンバリング・マップの作成手順としては、まず、各学期開講の科目の配置と科目間の順序

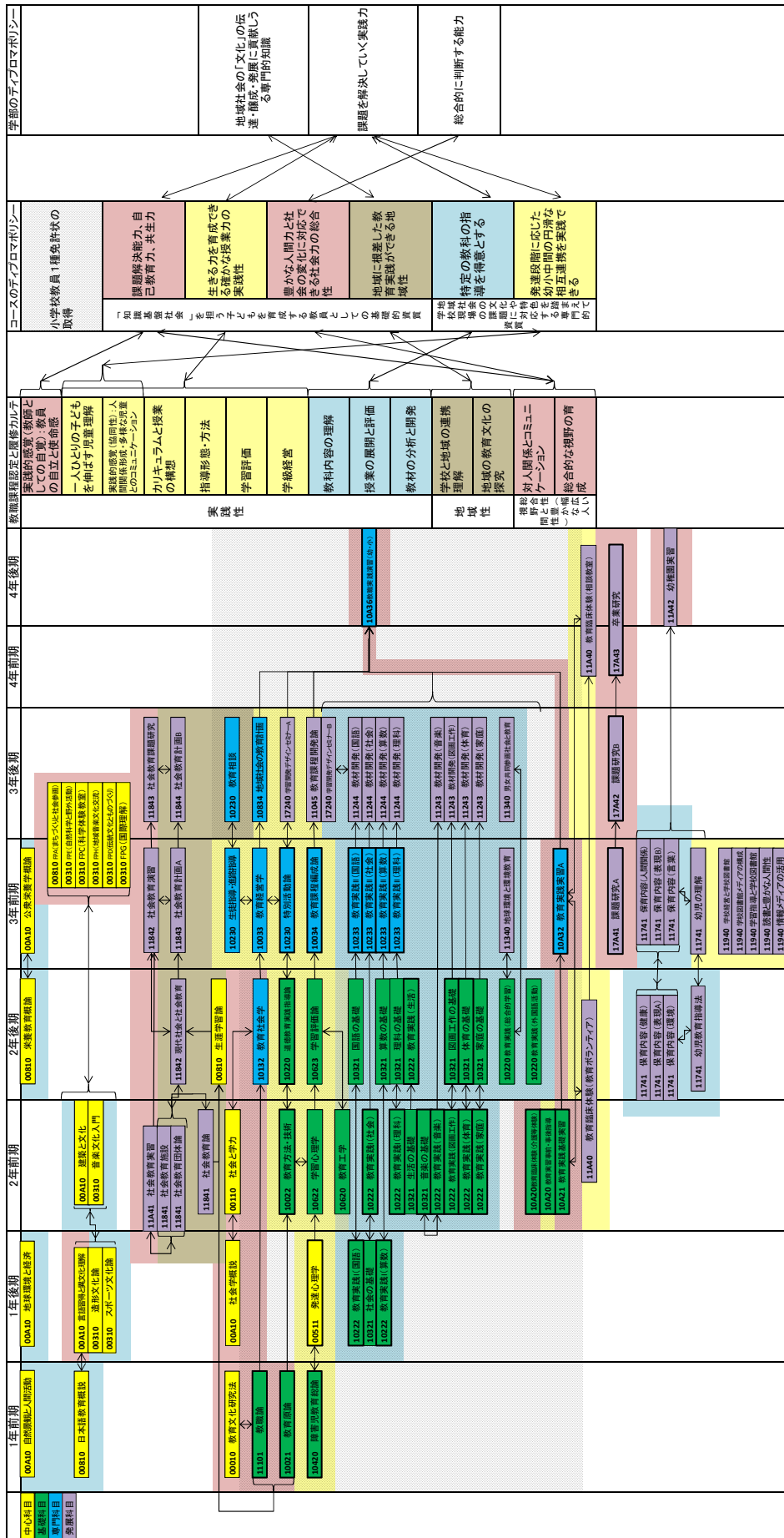


図2 カリキュラム・ナンバリング・マップの例 (児童教育コース教科実践力向上プログラム)

性や相関性を明らかにした後、各科目とグループ化したディプロマ・ポリシーとの関係性を検討し、マップ上に配置した科目の背景をディプロマ・ポリシーのグループ色で塗る。科目ナンバーについては、科目の配置と科目間の順序性や相関性が確定した後決定されることになる。

今回開発したカリキュラム・ナンバリング・マップにおいて使用した科目ナンバリングの方法は、前述の①学部・学科・科目群による分類と②学問領域・分野による分類を併用し、科目の順序付けについては、c) カリキュラムの積み上げによる順序付けの方法を使用した。また、今回の科目ナンバリングの目的はカリキュラム改善であり、学務システムでは既に別の科目識別番号を使用していることから、科目の識別については不要と判断し、f)科目類型番号、すなわち同じ番号が複数の科目に割り当てられる方式をとることにした。

科目ナンバーの各桁の設定方法は次のとおりである。まず、第1桁は学科内のコース名、第2桁はコース内のプログラム名、第3桁は各コースで設定した科目分野、第4桁は科目区分、第5桁は科目の順序性を示す。なお、第2桁については一つの科目が複数のプログラムに該当する場合があることから、各プログラムの番号として2の乗数を設定し、該当するプログラム番号の合計を16進数で表記することによって一桁で最大5プログラムまでの組み合わせを表現できるようにした。第3桁についても各コースで設定する科目分野が10を超える場合には16進数を用いて表現している。また、第5桁については順序性のない科目については0を割り当て、開講学期が異なる複数科目が順序性を持って並んでいる場合には、最初に開講される科目を1とし、順番に2, 3, 4と番号を割り当てている。

なお、山形大学においては、当初各学部で科目ナンバリングの方法を検討し、地域教育文化学部では前述の方法を提案したが、最終的に科目ナンバリングの方法を全学的に統一することになったため、本稿で提案したナンバリングの方法は採用されていない。

本稿で開発したカリキュラム・ナンバリング・マップを用いることのメリットとしては、(1)カリキュラムの体系性が各科目のディプロマ・ポリシーとの対応関係とは独立した形で表現できること、(2)カリキュラムの順序性の課題を確認することができること、(3)ディプロマ・ポリシーとカリキュラムの整合性を確認することができることの三点が挙げられる。

(1)カリキュラムの体系性が各科目のディプロマ・ポリシーとの対応関係とは独立した形で表現できること、につ

いてはカリキュラム改善の自由度を高めることにつながる。例えば、図1に示したカリキュラム・ツリーではカリキュラムの体系性がディプロマ・ポリシーと一対一対応で示されるため、ディプロマ・ポリシーと対応する形でカリキュラム設計を行った段階では適用可能だが、カリキュラム改善を進めようとした際に、ディプロマ・ポリシーとの対応関係が崩れることを恐れて柔軟なカリキュラム変更が困難になる可能性がある。これに対して、カリキュラム・ナンバリング・マップでは、カリキュラムの体系における科目の位置づけを変更する際にディプロマ・ポリシーとの対応関係を変更してもしなくても支障は生じない。

(2)カリキュラムの順序性の課題を確認することができること、については、具体的にはカリキュラム・ナンバリング・マップの順序性や相関性を示す矢印と科目ナンバーの整合性の有無によって確認することができる。科目ナンバーにおいて順序性が示されている科目群であるにもかかわらず、それらの科目間が相関性を示す両矢印で結ばれている部分や科目間の順序性を示す矢印の方向が逆転している部分がある場合には、カリキュラムの順序性について改善すべき課題があるということになる。

(3)ディプロマ・ポリシーとカリキュラムの整合性を確認することができること、については、まず、ディプロマ・ポリシーのグループ化の作業、および各科目とグループ化したディプロマ・ポリシーとの関係性を確認して各科目の背景色を決める作業を通してディプロマ・ポリシーがどの程度カリキュラムに反映されているかを確認できる。また、作成されたカリキュラム・ナンバリング・マップの背景色の分布を確認することでディプロマ・ポリシーの各グループが各科目群において偏りなく分担されているかどうかを確認することができる。そして、偏りがある場合にはディプロマ・ポリシーの内容と各科目の内容の整合性を再確認する形でカリキュラム改善の検討を行うことができる。

以上に示したメリットにおいて明らかなように、カリキュラム・ナンバリング・マップは、従来のカリキュラム・マップやカリキュラム・ツリーのようにカリキュラムを完成形として捉えるのではなく、継続的に改善可能なものとして捉えるものである。

このようなカリキュラム・ナンバリング・マップの特質により、現状のカリキュラムにおける科目間の関連性や順序性、ディプロマ・ポリシーとの関連性の全体像を見渡することができるため、授業を担当する教員同士で4年間のカリキュラム全体の中での自身の担当科目の位置づけや他の科目との関連性とその妥当性について議論し、カリキュラ

ムの課題を明確にし、カリキュラム改善を行うことが容易になる。

### 5. 今後の課題：ペルソナ・マーケティングの手法を用いたカリキュラム改善の提案

カリキュラム・ナンバリング・マップを用いたカリキュラム改善においては、近接した専門分野の教員間での議論は行いがやすいが、特に地域教育文化学部に見られるように異なった専門分野のカリキュラムが並行するマップの場合、それぞれの科目群の系統性に関する議論が中心になって異なる専門分野の教員間の議論が促進されない恐れもある。したがって、継続的なカリキュラム改革の取組を行う上での課題として、専門分野や立場の異なる教職員が大学教育の改革・改善に向けて、協働的に取り組む活動を促進することが挙げられる。そこで、現時点では構想段階であるが、このような活動を促進するためのコミュニケーションツールとして学生ペルソナを提案したい。

ペルソナは、データを基に作り上げられた架空のユーザーが満足するように商品やサービスを設計するマーケティング手法の一つとして開発されたものである。実際の顧客やユーザーに関するインタビュー調査やアンケート調査のデータに基づいて代表的な仮想人物の価値観や思考、行動パターンを設定し、名前・顔写真・プロフィール・最終的なゴールなどを明確にする。ペルソナ手法では、設定したペルソナを満足させるシナリオを作成し、検討する。ペルソナ手法のメリットとして、①顧客やユーザー像を明確にすることができること、②さまざまな担当者間で共通の顧客認識を保持することができること、③顧客やユーザーの観察から行動様式や価値観の形成過程を理解することができること、があげられている<sup>7</sup>。

大学におけるペルソナ手法導入例としては、名古屋文理大学における新入生アンケート調査分析結果に基づく入試広報のためのペルソナ作成の事例<sup>8</sup>がある。しかし、カリキュラム改革や学生対応の改善のためにペルソナを導入した事例は見当たらない。

学生ペルソナは、学生が受験生として大学と接触し、卒業するまでの5年間の体験を学生へのインタビューやアンケート調査のデータを基に類型化し、各コースや教育プログラム毎に代表的な仮想人物の価値観や思考、行動パターンを設定し、名前・顔写真・プロフィール・最終的なゴールなどを示したものである。データ分析に際してはインタビューなどの文字データに立脚し、当事者の内的視点を重視しながら実践に有効な仮説を構築する質的研究の方法で

あるグラウンデッド・セオリー・アプローチを用いる。具体的には文字データから大学での学習経験に関して共通する概念を抽出した上で、ディプロマ・ポリシーや学習成果に関わる概念をカテゴリー化し、学習経験による成長過程を学生自身の内的視点を重視しながら解明していく。

従来のペルソナ手法と異なる点は、大学での4年間の学習経験が学生の卒業時の価値観、思考、言動、進路選択にどのような影響を及ぼしたかを推測することで、カリキュラムの課題を明確にし、カリキュラム改革の際に4年間の学習経験を計画的に組織するために活用しようとする点である。

学習経験の組織化を行う際には、従来のような知識・技能の積み上げの計画よりも、習得した知識・技能やそれらを習得する経験によって学生ペルソナの価値観、思考、言動の成長を組織化することに重点を置くことになるだろう。教育活動においては、あらかじめ成果を予測し、計画通りに実行することは困難である。しかし、予測困難だからという理由で、従来のように各教職員が個別に学生を指導、支援するだけでは、現在の社会において必要とされるグローバル人材や地域のニーズに応じた人材といった専門知識よりも能力や態度、価値観の側面が強調される人材を育成することは困難であろう。

現行のカリキュラムが学生ペルソナをどのように成長させているか、あるいは学生ペルソナの学習経験の組織化に十分貢献しているか、また、教職員が大学教育の改革・改善に向けて様々な立場から行った提案が学生ペルソナをどのように成長させるか、といった議論を行うことで、学生ペルソナを専門分野や立場の異なる教職員が協働的に取り組むためのコミュニケーションツールとして活用できれば、カリキュラム・ナンバリング・マップを用いたカリキュラム改善をさらに効果的に行うことができるであろう。

また、学士課程教育の質的保証についても数値化可能な知識や技能面からの取組が先行しているが、本来的には質は数値化しえないものである。数値化しえない質を便宜的に数値化して測定することで見落としがちな部分を拾い上げ、学生の実感ベースで学習経験の質を向上させるためにも、学生ペルソナによるカリキュラムの継続的な検証と改善の方法を確立することは急務である。

### 注

<sup>1</sup> 文部科学省、「国立大学改革プラン」,平成25年11月  
[http://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/det](http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/det)



---

ail/\_icsFiles/afieldfile/2013/12/18/1341974\_01.pdf (2015年1月23日)

<sup>2</sup>大学間連携共同教育推進事業「分野別到達目標に対するラーニングアウトカム評価による質保証」  
<http://www.hakodate-ct.ac.jp/~w-loqa/summary.html>

(2015年1月23日)

<sup>3</sup> 池田らは、「カリキュラム・マップの言葉以外に、カリキュラム・ツリー、カリキュラム・チェックリスト、カリキュラム・アセスメント・チェックリスト、カリキュラム・フローチャートなどその開発の方法と結果の名称は様々である。あるいはカリキュラム・マップの言葉でカリキュラム・ツリーを示している例も見ることができる。この現状を一言で述べれば、2008年の学士課程答申のなかの「学士課程教育における方針の明確化」が求めるものは、各大学でいまだ模索されている状況だといえる。」と述べている(池田・野口・佐々木, 「学位授与方針から設計するカリキュラム・マッピングの提案と実践」, 『名城大学大学院 大学・学校づくり研究』第6号, 2014年, 30-31頁)。

<sup>4</sup> 池田・野口・佐々木, 前掲, 32頁。

<sup>5</sup> 小川勤, 「学士課程教育の質保証のための組織的カリキュラム改善の取組—『教育改善FD研修会』を通してカリキュラム改善の試み—」, 『京都大学高等教育研究』第16号, 2010年, 19頁。

<sup>6</sup> 小川勤, 前掲, 20-21頁

<sup>7</sup> 高井紳二編, 『実践ペルソナ・マーケティング』, 日本経済新聞出版社, 2014年, 15頁。

<sup>8</sup> 栗林芳彦・井上治子, 「名古屋文理大学新入生アンケート分析におけるペルソナ手法導入の試み」, 『名古屋文理大学紀要』第10号, 97-107頁, 2010年。